

祭の一句

名句鑑賞

春祭宿の障子をあけて見る

元来、春の祭は、その年の豊作を祈る「祈年祭」でした。作者は、旅先でたまたま春祭に出くわしたのかもしれない。外の様子が気になって宿の障子を開けてみたのでしょうか。そして、しばらくの間、祭の様子を眺めていたのです。季語は「春祭」で、春の句です。

大野 林火



昨年よりも老いて祭の中通る

夏祭、露店が立ち並び雑踏の中、作者は一人で歩いているのでしょうか。毎年この祭を見に来ているのかもしれませんが。そのとき、ふと自分が老いていることを感じたのです。「老い」という避けられないものを淡々と受け入れているかのようです。季語は「祭」で、夏の句です。

能村登四郎

漁夫の手に綿菓子の手秋祭

元来、秋祭は、秋の収穫を神に供えて感謝する祭でした。その秋祭に、漁夫の手に綿菓子の棒が握られているのを作者はどんな思いで見ているのでしょうか。季語は「秋祭」で、秋の句です。

西東 三鬼

聖夜とやヒロシマ環礁実験図

聖夜とは、聖誕祭（クリスマス）の前夜、クリスマス・イヴのこと。ヒロシマは、被爆地としての「広島」。また、かつて米国は、ビキニ環礁で核実験を繰り返しました。「聖夜」という清らかなイメージと「ヒロシマ」「ビキニ環礁核実験」の悲惨なイメージがぶつかり合い、渾然となって、不気味なイメージができています。季語は「聖夜」で、冬の句です。

中村草田男

字余り

俳句は、ふつう五・七・五の十七音からできていますが、五の部分の六音以上に、または七の部分の八音以上になることを字余りといいます。

俳句を作るときは、できるだけ「字余り」にならないように考えることが大切ですが、「字余り」が絶対にダメというわけではありません。

声を出して読んでみて、リズムが心地よく感じられれば「字余り」であっても、俳句として成立しているといえます。

音の数え方は、促音（っ）、撥音（ん）も「一音」です。また、拗音（しゃ、しゅ、しょ、など）は、かなで書くとき二文字ですが、音の数は「一音」なので注意しましょう。



子どもの俳句から

春

ひな祭り父の横顔ふとさみし

中学生

江野

響子



鑑賞のポイント

☆ひな祭りの日、父の横顔を見ると、さみしそうに感じられたというのです。父がさみしそうに見えたのはなぜでしょうか。作者自身もさみしさを感じていたのかもしれない。いろいろと想像してみましよう。季語は、「ひな祭り」です。

人形と顔を見合わせひなまつり

中学生

森井麻衣子

夏

母さんとまつりの朝の道をはく

小学生

川本

結加

おみこしが早くかつげと呼んでいる

小学生

村田

孝仁

☆ひな人形が飾られています。もしかすると、飾っている時のできごとかもしれません。人形の顔をじっと眺めていると、人形も自分を見ているように感じられたのでしょうか。季語は、「ひなまつり」です。

☆祭りの日の朝。夜になればにぎやかになります。静かな朝です。母と二人で家の周りの道をほうきで掃いています。どんな会話をしているのでしょうか。それとも黙って掃除をしているのでしょうか。季語は、「まつり」です。

☆祭りの日、作者はおみこしがどこかに置かれていたのを見たのでしょうか。そのみこしが、自分に対して「早くかつげ」と言っているように感じたのです。こんな経験、あなたにもありませんか。季語は、「おみこし」です。

秋

あきまつり500えんだまひかつてる

小学生

石田 典士

笹しなる願い重たき星祭

小学生

山添 泰希

秋祭り赤いわたあめ空にわく

中学生

石川 さとみ

芭蕉祭どんぐり拾う帰り道

中学生

炭本友貴子

鑑賞のポイント

☆作者はあきまつりをとても楽しみにしていたのでしょね。「500えんだま」が「ひかつてる」と表現したところに、作者の思いがよく表れています。500えんだま、どうするのでしょうか？季語は、「あきまつり」です。

☆星祭とは七夕のことです。短冊に願い事を書き、笹につるすという風習があります。いろいろな「重たい願い」がありますね。あなたならどんな願い事を書きますか。季語は、「星祭」です。

☆比喻表現がとてもよく生きている句です。「赤いわたあめ」という比喻表現について何のどんなようすを表しているのか、考えてみましょう。季語は、「秋祭り」です。

☆芭蕉祭は毎年十月十二日に芭蕉の生地である伊賀市において行われます。「芭蕉翁記念館」に行き、芭蕉のことや俳句についてぜひ学習してください。作者も記念館に行ったかもしれませんね。季語は、「どんぐり」です。

